

六花



2009

平成21年

俳句雑誌 りつか
chairman Yamada Rokko
secondary c, and the
editor in chief Kotori
cover designed by little bird

8月号

たん
丹

氷 柱

山田六甲

こ
氷こおい柱ばしら 布で包みて取り替ふる

れ
レース編みをれば猫きて膝ひざせがむ

が
がたつける祖母愛用の籐と寝ね椅い子す

さ
鯖さばを焼く炭火を熾いこす 渋しぶ団うち扇わ

い
石拾ふ能の登とこ金んご剛うの 西にし日び中なか

あ
朝顔に風やはらかく吹きにけり

く
熊蟬を胸に止まらせ顎あご引きぬ



な 何杯も突くをせがまれ 心ところろてん太

ど 土ど用よう灸ゆう吹きつつ据すゑる足三里

と 遠と山おやまに 稻いな光なびかいして 更ふけにけり

い 家路への半なかばに牛を冷やしやる

え 遠心力つけて 早さ苗なえの 束たば放ほうる

る 縷る紅こう草そう傾ける日につぼみけり

あ 雨戸線くる音に 朝あさ蝉ぜみ襲おそひくる

こ 小刻みにふるへる指でレース編む

れ 冷徹なまでにうすもの羅着こなせる

が 蛾の翅はねに瞬またたき明くる短夜たんやかな

さ 最果さいはてを空に探せる原爆げんぼく忌

い 稲妻いなづまに研とぎ澄まさる肌はだえかな

あ 四阿あずまやに睡蓮すいれんの夜を過ごしをり

く 梔子くちなしの香に透きとほる我が身かな



な 夏なつ瘦やせに紅濃く引きて出でにけり

ど 都と々と逸つの声細く聴く端は居しかな

と 遠と嶺うねより雷鳴らいめい渡り来たりけり

い 息詰めて西すい瓜かに刃先入れにけり

え 襟えり元もとをゆるり纏まとふ宿やど浴ゆ衣か

る 瑠璃色の短冊揺るる玻は璃り風か鈴た

あ 鮮やかに蝉鳴き集つどひ初そめにけり

かなかなや辨当忘れ来し但馬

六甲



かなかなやべんとうわすれきしたしま ろっこう

今月も夢風撰に相当する句がなかった。記録的な長梅雨の明けのをじつと待つ蟬の心境でもあるが、梅雨明けの抜けたような青空に盛り上がる入道雲や天の河をもたらしてくれる楽しみがある。毎回こんなことを呟いているのも暑さしのぎにはなるう。じつの所、小生もいささか低迷しているのがあります。但馬地方では梅雨明け即かなかなが鳴いているのでありました。かなかなは蝸（日暮らし）その蝸の悲しげな声。乙ですぬく

六甲

四月馬鹿しがっぱか

貝森光洋

四月馬鹿生死を分ける一語あり
月光に重さありけり白木蓮はくもくれん
ふくよかに耳の形の白木蓮
鶯餅うぐいすもち歌が上手になりそうな
空を飛ぶ鳥さえ危うき目借めかりどき時

夕 星

梶浦玲良子

たんぽぽの絮わた鴻こう鵠こくのこころざし
春昼の口ばかりなる木魚かな
うたれたる雉き子紺碧こんぺきをちりばめて
歓声の裏へ廻りぬ座ざ禅ぜん草そう
夕星を掴つかみそこねし糸柳

雪 卿 集

蓮はす青あお葉おぼ

木内美保子

鯉のぼり麦の穂波の揺るる上
花終へて首振つてゐる芥子の芯
夏帯や形見の人の染みの跡
つぎつぎと風走り行く蓮青葉
裂ける程口あけて待つ燕の子

手 首

笹村政子

鮓すし桶おけに水張つてをり子どもの日
さくらんぼ茎くき立たせては供へけり
牛蛙声の重なり合うて来し
掌てに乾く天道虫の尿ゆまりかな
新牛蒡しんごぼう削る手首のやはらかし

せつ じゆ しゆう
雪 樹 集

風薫るかぜかお

永田 勇

春嵐しゅんらんに真向ひ鴨の浮き沈む

藤棚にリュツクの子らの憩いこひをり

臥ふせる身を薫風くんぷう撫でてゆきにけり

川沿ひに歩かば海へ風薫る

鯉のぼり棹さおを尾びれの打ちぬたる

野遊のあそび

久永つう

立春と吟ぎんきながら曆こよみ繰る

薄氷うすらいを風の解とかしてゆきにけり

水仙すいせんのありあまるほど香りけり

野遊のあそびや空押し上げて深呼吸

暁あかつきの庭に蜜吸ふ目白かな

蛍雪譚 六甲

薫風にシャツふくらませ二輪の児 藤原 春子

帆を孕んだヨットを彷彿とさせる。二輪車に乗った子供の勢いや、五月の風を胸元から呼び込んで、シャツが膨らんでいる。二輪車の速さも十分に伝わってくる。五月らしい句だ。

たんぼぼの絮一陣の風に発つ 堤内久美子

一陣の風とはひとしきり吹くこと。つまり強く風が吹くのを待っていたようにたんぼぼの絮が一斉に飛び立った。一陣は一つの軍隊の意味もあるからまさに壮観な第一陣の出発である。たんぼぼの飛び立つ光景は童話的であるが、この句は格調高くまた緊張感をもたらず表現にしている。

飛行機を見上げては子の潮干狩 平居 滯子

潮干狩りの子どもの様子を生き生きと詠んだ。潮干狩りに来ている子どもは貝にも、飛行機にも興味があるのだ。貝は掘りたいは、真上を飛ぶ飛行機は気になるは、で大忙しな潮干狩りなのである。

六花集

六甲選



藤原 春子

どの窓も五月の風に開け放つ
川堰の点検農夫風光る
薫風にシャツふくらませ二輪の児
竹藪の闇なる中や大南風
山の端に朝風うけて五月鯉

堤内久美子

たんぽぽの絮一陣の風に発つ
ぬきん出て風の中なる今年竹
散るリラの風に添ひくる匂かな
風止みて藁に垂れる幟かな
うゝうゝと吾子の指差す初幟